

折元 洋巳(おりもと ひろみ) 略歴

一般社団法人全国防犯啓蒙推進機構・理事長

大阪府警察で20年のキャリアを持ち、留置場の看守として1,000人以上の犯罪者の心理や手口を熟知した防犯の専門家。この経験を活かし、「犯罪者目線から語る防犯対策」をテーマに、全国各地で講演活動を展開。メディア出演多数。またSNS閲覧数160万超のインフルエンサーとしても活躍中。

X https://x.com/hiromi_irimoto
threads https://www.threads.net/@bouhan_ha_irimoto

ブログ「折元犯罪予防ラボ」 <https://bouhan.substack.com/>

折元 洋巳(おりもと ひろみ) 略歴

一般社団法人全国防犯啓蒙推進機構・理事長

大阪府警時代に1,000人超の「犯罪者の本音」を聴いた元留置場看守。防犯対策のプロとして、

| 犯罪者評論家 | 大家さん向けに経営物件の防犯リスク発信中 | 13回の手術を乗り越えた「がんサバイバー」 | アメフト | つぶあん好き | TV出演多数 | ブログ

「1,000人の犯罪者」に学んだ「元留置場看守」が教える、目からウロコの「トクリュウ」「空き巣」対策

私は警察官として20年間、1,000人以上の犯罪者と接してきた。その多くは留置場での勤務中に出会った人々だ。留置場では、彼らは意外なほど本音を語る。「刑事には内緒ですよ。おやっさんだけ言いますわ」と、他人には決して話さない手口や心理を打ち明けてくれた。

そこで見えてきた現実は、世間で「常識」とされている防犯対策の多くが、実は犯罪者の実態とかけ離れているということだった。今、街で頻発する「トクリュウ」事件や空き巣被害。その対策として広く認知されている方法の中には、残念ながら致命的な誤りも少なくない。

親の願いが裏目に出た、"安全装置"の落とし穴

たとえば、マンションのオートロックだ。子どもの一人暮らしを心配する親御さんの多くが、まず「オートロック付き」の物件を探す。確かに一見、安全に思える。しかし、私が留置場で出会った泥棒たちは、このオートロックマンションを格好のターゲットにしていた。

なぜか。皮肉なことに、それは防犯の素人が作った「安全装置」だからだ。当初のオートロックシステムは、出る時にサムターンを回したり、ボタンを押さないと外に出られない仕組みだった。この頃は確かに、高い防犯性を確保していた。しかし、「利便性」を優先した結果、今の主流は人の動きを感じて自動で解錠するシステムに変わってしまった。ある意味、泥棒にとって願ってもない変更だった。実際、外国人窃盗団が狙う物件の大半がオートロックマンションだという事実は、極めて示唆的だ。

住人に紛れて一緒にエントランスを通過する、いわゆる「共連れ」を読者は連想するだろうが、むしろそれは少ない。顔が見られるリスクを犯したくないし、そもそももっと簡単な手口でエントランスを突破するのだ。その手口はここでは明かせないが。

笑顔の挨拶が通行手形に

ある日、留置場で一人の泥棒に尋ねたことがある。「平日の昼間をメインに活動していて、住人と出くわすことはないんかい？」

彼は当たり前のように答えた。「ありますよ。でも笑顔で挨拶すればOKですわ！」

なぜこんなことが可能なのか。それは住民同士のコミュニケーションが希薄な現代の集合住宅事情が背景にある。見知らぬ人でも、オートロックの中にいれば「誰かの来客か、住人なのだろう」と思い込んでしまう。しかも、愛想よく挨拶をされれば、「感じの良い人」という印象すら持ってしまうのだ。

プロの泥棒は防犯カメラを無視する

防犯カメラという呼称に、私は長年違和感を抱いてきた。「監視カメラ」と呼ぶべきではないか。なぜなら、このカメラは本来の「防犯」、つまり「事前に犯罪を防ぐ」という機能を「すべての犯罪」に対して果たしているわけではないからだ。

私は泥棒被害に遭ったマンションの依頼で、しばしば防犯カメラの映像を確認する。そこに映るのは、カメラの存在を知りながら、堂々と侵入する泥棒の姿だ。確かに帽子やマスクで顔を隠してはいるが、カメラ自体は全く意に介していない。

つまり、監視カメラは泥棒の侵入を「防ぐ」ことはできていないのだ。映像は確かに事後の捜査には有効だが、それはあくまでも「事後」の話であって、「防犯」とは呼べない。

ただし、一定の効果がないわけではない。下着泥棒のような比較的軽微な犯罪には抑止力となるし、エレベーター内の映像を1階ロビーに映すことで痴漢を防ぐ効果もある。ゴミの不法投棄対策としても有効だ。

最も警戒すべきは「カメラを付けたから安心」という過信だ。設置の際はカメラ業者任せにせず、必ず防犯の専門家に相談してほしい。カメラは確かに有効なツールだが、正しい理解と運用があってこそ、その真価を発揮するのだ。

ベランダ連鎖型侵入の落とし穴～甘い高層階の安全神話～

「うちは3階だから大丈夫」「高層階なら心配ない」。マンション暮らしの方からよく聞く言葉だ。確かに、ベランダを直接よじ登ってくる泥棒は稀だ。しかし、より深刻な問題が潜んでいることを、私は知っている。

それは、マンションのベランダにある「隣家との仕切り」だ。この部分は消防法により、火災時の避難経路として確保する必要がある。つまり、簡単に越えられる構造でなければならない。当然、この仕切りを頑丈にすることは法律違反となる。

ある日、マンションの自治会から窃盗被害現場の確認を受けた。その現場で私が目にしたのは、衝撃的な光景だった。上層階のベランダの仕切り板が、端から端まで破壊されていたのだ。泥棒は一つの玄関から侵入した後、この仕切りを次々と破って隣室へ移動し、フロア全ての部屋に侵入していた。

この手口を使えば、10階であろうが20階であろうが、同じように被害に遭う可能性がある。

では、どう対策すべきか。答えは意外にシンプルだ。マンションの場合、個別の対策ではなく、全ての玄関の防犯対策を徹底することが重要なのだ。一戸も玄関からの侵入を許さなければ、ベランダ経由の被害も防げる。

優秀すぎる鍵が生んだ皮肉な結果

世界でもトップクラスの技術を持つ日本の鍵メーカーは、常に泥棒の新手口を研究し、即座に対策製品を開発してきた。「日本の安全を守る」という強い使命感のもと、次々と高性能な防犯鍵を生み出している。その代表格が、複雑な溝を持つデインプルキーだ。

しかし、皮肉なことにこの優秀すぎる技術が、思わぬ結果を招いている。警察庁の統計を見ると、住宅への侵入手口の主流は「バール破壊」や「サムターン回し」など、鍵そのものを標的としない方法に変化している。泥棒からすれば、高度な技術で守られた鍵を破るより、他の侵入方法を選ぶ方が効率的だと判断しているのだ。

どのような玄関対策が効果的なのか。

私の結論は、警察が昔から提唱している「ワンドアツーロック、スリーロック」に行き着く。複数の鍵を設置することで、泥棒に「この家は面倒だな」と思わせるのだ。考えてみてほしい。一つの鍵しかない家と、二つ三つの鍵がある家が並んでいたら、泥棒はどちらを選ぶだろうか。答えは明白だ。彼らは「入りやすく、逃げやすい家」を望む。わざわざ手間のかかる家を選ぶ理由はないのである。

重要なのは個々の鍵の性能ではなく、「この家は面倒だ」という印象を与えることだ。可能であれば、シリンダー錠とデジタルキーといった異なるタイプの鍵を組み合わせることをお勧めする。一つの手口では対応できないと分かれば、泥棒は自然とその家を避けるようになる。これこそが、本当の防犯対策の基本なのである。

窓の防犯対策、最適解はこれだ

泥棒の侵入経路として最も多いのが窓からだ。では、どのような対策が効果的なのか。主な選択肢を検証してみよう。

まず「防犯面格子や防犯シャッター」。物理的に窓の外側に設置するため、分かりやすい対策だ。最近は強度を増した製品も登場し、確かに防犯性は高い。しかし、入居者が外出時に「閉める」習慣をつけないと効果が半減してしまう。また見た目の圧迫感も無視できない。

次に「防犯ガラス」。ガラス自体を強化する方法で、見た目は普通のガラスと変わらず、視界も妨げない。強度もランクが選択でき、別荘や夜間人口の少ない場所では有効だ。ただし、強度の高いものは相応の費用がかかる。

「ガラスセンサー」は、振動やガラスを割る時の音波に反応して警報を鳴らす。比較的安価だが、風でガラス窓が揺れただけで警報が鳴るなど、誤作動の可能性もある。

そして「防犯フィルム」。これは既存のガラスに強度のあるフィルムを貼り付けるもので、防犯ガラスより低コストで導入できる。ガラスの内側(室内側)に貼るため、地震などのガラス飛散防止効果も期待できる。裸足で生活する日本人の住環境に適している上、紫外線カット効果で床や畳の日焼け防止にもなる。フィルムの厚みにより強度は異なるが、一般的な集合住宅であれば十分な防犯効果が得られる。

多角的に検討した結果、私は「防犯フィルム」を最も推奨する。費用対効果が高く、複数のメリットを併せ持つからだ。一般住宅には、過剰でもなく不足でもない、最適な防犯対策と言えるだろう。

トクリュウ事件の本質～従来型犯罪との決定的な違い～

近年多発するトクリュウ事件は、一般的の犯罪とは本質的に異なる性格を持っている。残念ながら、物理的に住居侵入を防ぐことはかなり難しいのが実情だ。にもかかわらず、報道機関も防犯の専門家も、従来型の「泥棒」や「強盗」と同列に論じているため、効果的な対策を見誤る危険性が高い。

従来型の強盗事件が比較的少なかった理由は明確だ。捕まった際の量刑が泥棒と比べて格段に重いため、犯罪者にとって「割に合わない」と判断されていたからである。一般的な泥棒は、留守宅への侵入技術を磨き、空振りのリスクを背負いながら犯行に及ぶ。一方、強盗は人がいる場所で暴力や脅しを用いるため、確実に財物を奪える反面、捕まれば重罪は免れない。

しかしトクリュウは、この常識を根底から覆す。最大の特徴は、実行犯が素人であり、指示役の言いなりになって犯行に及ぶ点だ。さらに重要なのは、指示役が実行犯の逮捕を織り込み済み

という点である。実行犯は素人であるがゆえに、現場での緊張や恐怖から過剰な暴力を振るいがちだ。

この状況を根絶するには、「闇バイト」への応募を食い止めすることが最優先なのだが、その背景には若者の経済的困窮という深刻な社会問題が潜んでいる。「失われた30年」の影響は、こんな形でも私たちの安全を脅かしているのだ。

喫緊での対策としては、開口部の施錠は(昼間も在宅中でも)常に行なうことは当たり前として、最低でも「防犯フィルム」は設置したい。これにより、侵入に時間がかかるようになり、警察への通報の時間を稼ぐことができれば、(これでもリスクは残ると言わざるを得ないが)命を守れる可能性は格段に高まる。今後は、日本の住居に適した「簡易パニックルーム」の発想も必要になるかもしれない。

13回のがん手術が教えてくれた防犯の本質

私が48歳で余命宣告を受けてから、13回のがん手術を経験し、今に至る。その間、「なぜ私は生きられているのか」という問いを常に抱えてきた。その答えを、私は防犯啓発活動の中に見出した。

これまで書いてきた通り、犯罪者は偶発的な犯行というケースがあるものの、大半は己の欲を満たすために、「いつ」「どこで」「誰に」「何を目的に」「どうやって」犯罪を犯すか計画的に事を進める。一方で、被害者はほぼ100%「ある日突然に、また想定外に被害者になる」のだ。

皆さんに犯罪者を直接捕まえることも、報復することも、事前に諭してやめさせることもできない。だから、まずは「防犯意識」を持って頂きたい。「私は大丈夫」と何の理由もなく安心するのはやめてほしい。

「防犯意識」を持つてもらえたなら、次には「正しい防犯知識」をつけてほしい。世間には残念ながら間違った防犯知識が氾濫している。それは犯罪者を知らない人たちがその犯罪者に対する対策をビジネスとして語り、マスコミが面白おかしくそれを広めるからだ。

私は防犯啓発に命をかけている。正しい防犯知識を広めることで、一人でも多くの命が守られる。一つでも多くの悲劇を防ぐことができる。それが、生かされている私に与えられた使命なのだ。

できれば日本の皆様にこの事実を知っていただき、「世界一安全な国、日本」にしていくければと心から願っている。なぜなら、「防犯は、命を守ること」だからである。